

大悟法利雄

幾山河越えさり行かば

——
若山牧水の人と歌
——

大悟法利雄

幾山河越えさり行かば
——
若山牧水の人と歌
——

彌生書房刊

大悟法利雄（だいごぼう としお）

1898年（明治31年）、大分県に生れる。中学卒業頃から作歌、若山牧水門下となる。雑誌記者を経て沼津の牧水方にあつて、「創作」「詩歌時代」の編集を助け、牧水没後『牧水全集』（改造社刊）を編集、執筆生活に入る。戦後、雄鶏社版『若山牧水全集』を編集する。多年「創作」の選者を続け、著書に歌集7冊、その他「若山牧水伝」「若山牧水新研究」「若山牧水の秀歌」「なつかしの鉄道唱歌」等多数。

©1978

検印省略

幾山河越えさり行かば 辛 1,400

1978年9月5日 初版印刷

1978年9月15日 初版発行

著 者 大 悟 法 利 雄

発 行 者 津 曲 篤 子

発 行 所 株式会社 彌 生 書 房

東京都新宿区中町18 電話・東京(260)3707(代表)

印刷・明和印刷(株) 製本・(株)小実製本印刷工場

<落丁・乱丁本はお取りかえいたします>

0095-78100-8525

目次

青春時代の歌……………	七
牧水の恋愛と恋人小枝子……………	三五
その後の牧水とその歌……………	六六
牧水名歌考……………	二五
①「幾山河」考……………	三五
②「白鳥は」考……………	六二
③「白玉の」考……………	六七
牧水文学散歩……………	七二
①牛込専念寺……………	七二

② 東京郊外百草園……………	一八三
③ 房州根本布良の海岸……………	一九二
④ 暮坂峠附近……………	二〇八
⑤ 沼津そこそこ……………	二一九
⑥ 生家と牧水記念館……………	二三六
“幾山河”の歌……………	二三三
若山牧水略年譜……………	二三七
巻末に……………	二四三

幾山河越えさり行かば

——若山牧水の人と歌

青春時代の歌（評釈）

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく
いくやまかは

若山牧水は数多くの名歌を遺している。昔から傑れた歌人は多く、名歌の数は限りないが、あらゆる階級、あらゆる年齢層の人々からほんとうに広く愛誦される歌の多いという点では、まず牧水を挙げて、恐らくどこからも異論は出ないだろうと思う。その牧水の作の中でも最も広く愛誦されているのがこの歌で、これは種々の点で牧水の代表作というにふさわしいから、私はいま牧水の人と芸術を語ろうとするに当ってまずこの歌から始めることにしたいと思う。

明治四十年六月といえ、牧水は数え年二十三歳、今の数え方ならば二十一歳、まだ早稲田大学の学生だったが、数日前に学校の試験も終って暑中休暇に入ったので、その二十二日帰省の途にいた。同郷で同宿している国学院の学生直井敬三のほかに学校の同級生土岐善磨も同行だったが、三人は京都で下車、牧水の中学時代の友人に迎えられて市外花園村のその下宿に落ちつき、翌日から三日間京都見物をしたのち、土岐と別れた二人は神戸三の宮の牧水の親戚長田方に泊った。

牧水の郷里は日向（宮崎県）の山村、当時日向にはまったく鉄道がなかったので、東京との往復は細島・神戸間は瀬戸内海通いの汽船によるほがなく、この時も直井は二十七日夜の船で日向に向ったが、牧水はひとり陸路中国地方を廻って帰郷することになった。牧水にとっては生れて初めてのほんとうに旅らしい一人旅であり、これは歌の上でも生涯で最も記念すべき旅となった。

夏なほ寒き布引の

滝のひびきをあとにして

神戸の里を立ちいづる

山陽線路の汽車の道

これは誰知らぬ者もない大和田建樹の鉄道唱歌「汽笛一声新橋を、はや我汽車は離れたり」にはじまる東海道線の歌に続く山陽線の歌の発端だが、それこそ初めてこの山陽線の汽車に乗り、ただ一人中国路の旅に出かける若き牧水の胸はどんなに躍っていたことだろうか。

一樹一草

追懐さはならむ

われ今宵

君が故郷に宿る、

微雨晴れて

また降る

斯る時

旅の愁ひの

つきがたき

ものぞかし

一杯を呼び

夢に君と遊ばむ、

六月廿九日夜 岡山にて 牧水生

岡山駅前の「はつね」という旅館から東京の歌の友人正富汪洋宛てにこんな絵葉書を出しているが、初めての一人旅の楽しい昂奮の中で早くも旅愁を感じながら、一杯やろうとしているその姿が目に見えるようである。

この時の旅に下の関で友人大見達也と一緒にとった写真が遺っているが、それで見ると牧水は学生服ではなく、もめんの白がすりの着物に小倉の袴をはいている。上半身だけだが、足は草鞋脚絆だったに相違ない。写真では無帽だが、夏だから、多分鏝広の麦藁帽子を冠って歩いていたらうと思われる。三十日朝の牧水はそんな旅姿で「はつね」旅館の玄関を出た筈である。恐らく前夜の雨もあがつてすがすがしく、まだ新しい草鞋で足も軽く、若い胸は未知の中国路の旅に新しく躍っていたであろう。

岡山から高梁川^{たかはし}流域の湛井^{たたい}までは中国鉄道湛井線を利用したものと思われる。湛井からは当時は汽車がなかったから高梁川に沿って歩いた筈だが、それだと高梁（現在高梁市）泊り、次は新見（現在新見市）泊りとなるのが普通、そして新見からは広島県に行く旧道は、苦坂峠^{にがさかとうげ}というのを越

えて果境でまた二本松峠を越える。牧水はそこを通ったに相違なく、その二本松峠の茶店に泊ってそこから東京の友人有本芳水宛てに出した葉書に書かれていた二首のうちの 하나가、初めに記した「幾山河越えさり行かば」の歌だったことがわかつてゐる。してみれば、この歌は新見と二本松峠との中間あたりで作られたものと考えてよからう。

このあたりの詳しい考証は別項に譲ることにするが、私は昭和四十二年にこの「幾山河」の旅の草鞋の跡をずっと歩いてみたことがある。そして新見から苦坂峠を越えてうす暗い密林の中をしばらく下り、遙か下に阿哲峽の溪流とそのま向うの雄大な山々のたたずまいを見出だしたとき、「あッ、これだ、これだ」と心に叫んだ。岡山から高梁、新見と泊りを重ねてここまで来れば「幾山河」という旅心になるのは当然だし、ここほどその歌にびつたりの所は他にはなからうと思われたのである。その当否はしばらくおくとして、以上でこの歌の作られた場所が大体この苦坂峠、二本松峠の附近であることと、それが明治四十年七月の初めだということはわかつたであらう。

ところで、この歌の初句を「いくさんが」と読む人が意外に多い。実際に短歌を作っている人にはあまりないようだが、詩吟などやっている人のなかにはそう読まないと感じが出ないように思っている人がかなりいる。しかし、これはぜひ「いくやまかわ」と読んでいただきたい。漢詩の日本読みなどの場合なら知らぬこと、国語としてはそれが正しく、「いくやまかわ」では初句の五音の所が六音で一音の字余りになるけれど、その方が、ずっと暢びやかにすがすがしく、歌の「調べ」としても遙かに傑れている。もちろん牧水自身初めからそう読んでいたし、牧水の自筆で「幾山川越え去り行かば」と書いたものが幾つかあるくらいである。このほか言葉にわかりにくいところは

ないように思うが、第四句の「はてなむ」は最初発表された時には「終てなむ」となっているほどで「はつ」は「終る」とか「尽きる」とかいうような意味で、「なむ」はもちろん願望の氣持があるけれど、ここでは「はてなむ国ぞ」は「はてむ国ぞ」と同じくらいに解してもよさそうに思う。

一首の意味は「自分は今ただ一人こうして旅に出て次々に山を越え河を越えて歩き続けているが、日毎に孤独感寂寥感が深まって来て堪えがたいのを覚える。いったいなおどれだけ多くの山や河を越えて行けば、この孤独感寂寥感の消えはてしてしまう国に出られるのだろうか、思いながら今日も旅を続けている」というので、行けども行けども尽きない旅愁を歌ったものだが、この歌のすぐ前には「けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつゝあくがれて行く」という歌があるから、それも一緒にして味わってみると更に感じがよくわかって来る。

牧水は中学生時代から西行や芭蕉などのような旅にあらがれていたが、旅へのあらがれはもっと早くからあった。幼い時から見なれている西国三十三カ所巡りの巡礼が、白無垢に笈摺を背負い、菅笠を冠り、手甲脚絆に草鞋ばきという服装で、手には鉦を鳴らしながら御詠歌をうたつてまわる姿など、どれだけ大きなあらがれの目で眺めていたか知れない。今度の旅は、そういう巡礼の姿こそしていないけれど、心の中ではいつもその鉦をうち鳴らしながら歩いているのであり（歌の「あくがれ」は「あらがれ」と同じ）、その氣持は「幾山河」の歌にも流れている。

西行や芭蕉それから巡礼、遍路というような者にあらがれるといえ、いかにも日本的な、それも古風な旅ということになるが、「幾山河」の歌から感ぜられるのは、決してそればかりではない。

牧水は、早稲田では英文科の学生として外国文学の講義などきいていたから、ボードレーやワーズワースの詩に出て来る旅なども知っていたし、この前年に出版された上田敏の訳詩集『海潮音』の中にあるカール・ブッセ作「山のあなた」などはこの頃特に愛誦していた。牧水は生前に歌人として知られるばかりでなく、その短歌や新体詩の朗詠は天性の美しい声と独特の調子とで、誰も追隨することの出来ない名手として定評のあった人で、その朗詠ぶりはこの頃既に学校その他で評判になっていたほどである。ひとりで山路を歩く時などよく自作の歌や愛誦する詩などを朗詠する癖のあった牧水は、この時の旅の途中でも「山のあなた」の詩を思い出しては口ずさんでいたに相違ない。

山のあなたの空遠く

「幸」^{さいはひ}住むと人のいふ。

噫、われひとと尋めゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人のいふ。

カール・ブッセのこの名作の気分が、「幾山河」の歌に流れていることは明らかだが、そんなわけで、「幾山河」には日本的なもの、西欧的なもの、やや古風なもの、近代文学的なものなど、さまざまな要素が渾然として融合していることを見のがしてはならない。そしてそれは孤独感寂寥感を歌ってはいいても、つまり旅愁であり、作者はまだ二十一歳の青年だから、決して陰鬱なものではな

く、一首としての調べは、むしろ豊かであり、さわやかで美しいといってよい。この歌があらゆる年齢層の人々から広く愛誦される秘密はそんなところにあるのではないかと思う。

それともう一つ、この歌にはどこかしら恋愛的情緒さえ漂ってはいはないかという気が私はする。そういえばブッセの「山のあなた」にもそんな情緒が感じられるが、私が今ここでこんなことを言い出したのは決して私の感じだけではなく、別に一つの理由がある。というのは、この旅が牧水の恋愛の初期だったことがはっきりしているからである。その恋愛についてはやがてもっと詳しく語るつもりだが、牧水はこの旅に出る直前に園田小枝子という女性と武蔵野を歩いており、この旅の中で、明らかに彼女とわかる恋愛の歌を作っている。

以上、私はこの歌の注目すべき点をいろいろ述べて来たが、最後にもう一つ付け加えておきたいのは、この「幾山河」が牧水初期歌風の開花を告げる極めて重要な一首だということである。

牧水は中学初年の頃から歌を作り、級友たちと回覧雑誌を出したり、新聞雑誌に盛んに投書したり、かなりな文学的活動をしてはいたが、中学時代の歌はある程度の才能を見せてはいるものの、要するに幼ない趣味や配合やのこしらえものに過ぎなかった。明治三十七年春、中学を卒業して上京、早稲田大学に入り、尾上柴舟門下として雑誌『新声』の歌壇に拠るようになってからの歌も、浪漫主義全盛の歌壇の影響を受け、華麗だけれど内容は空疎な作が多く、まだ見るべきものは少なかった。

ところが、早稲田の学生として外国文学にも接し、将来の作家を夢みつつあった牧水は、当時の文壇に擡頭しつつあった自然主義文学によって開眼されたため、歌もその影響を受け、三十九年か

らは現実を直視し実情実感を重んずる歌風になって来た。その傾向の急速な成長を見せたのが翌四十年に入ってからである。

この時の旅は実にそういう時期に当り、この旅中の作によって牧水初期の歌風はほぼ確立されたといつても過言ではなく、「幾山河」の歌はその開花を告げる最初の一輪だといつてもよい。その点でもこの一首はまことに記念すべき作品だから、私は躊躇することなくこの歌を牧水の代表作とするのである。

はつ夏の山のなかなるふる寺の古塔のもとに立てる旅びと

これには「山口の瑠璃光寺にて」という詞書がある。

「幾山河」の歌を作ったあと、二本松峠からの牧水の足跡はあまりはつきりしないが、とにかく宮島に行き厳島神社に参ったあと、この山口に廻っている。

「古塔」というのは今国宝になっている五重塔だが、時は初夏、古都山口は青葉に包まれ、山の中の古寺瑠璃光寺の塔もその青葉の中に端然と聳え立っていただろう。「旅びと」というのは同じ時に参詣していた他の旅行者ではなく、牧水自身である。大内文化の昔を偲ばせる唐風と和風のとけあった様式で、檜皮葺の屋根がゆるやかに流れ、隅軒の反りかえった美しい塔を仰いでいる感懐は少しも歌われていないが、それが却って読者の想像を逞しくさせる。友人たちと初めて京都見物をしたのち、ただ一人初めての中国路に入り、「幾山河」の歌を作り、宮島では厳島神社の朱塗り